

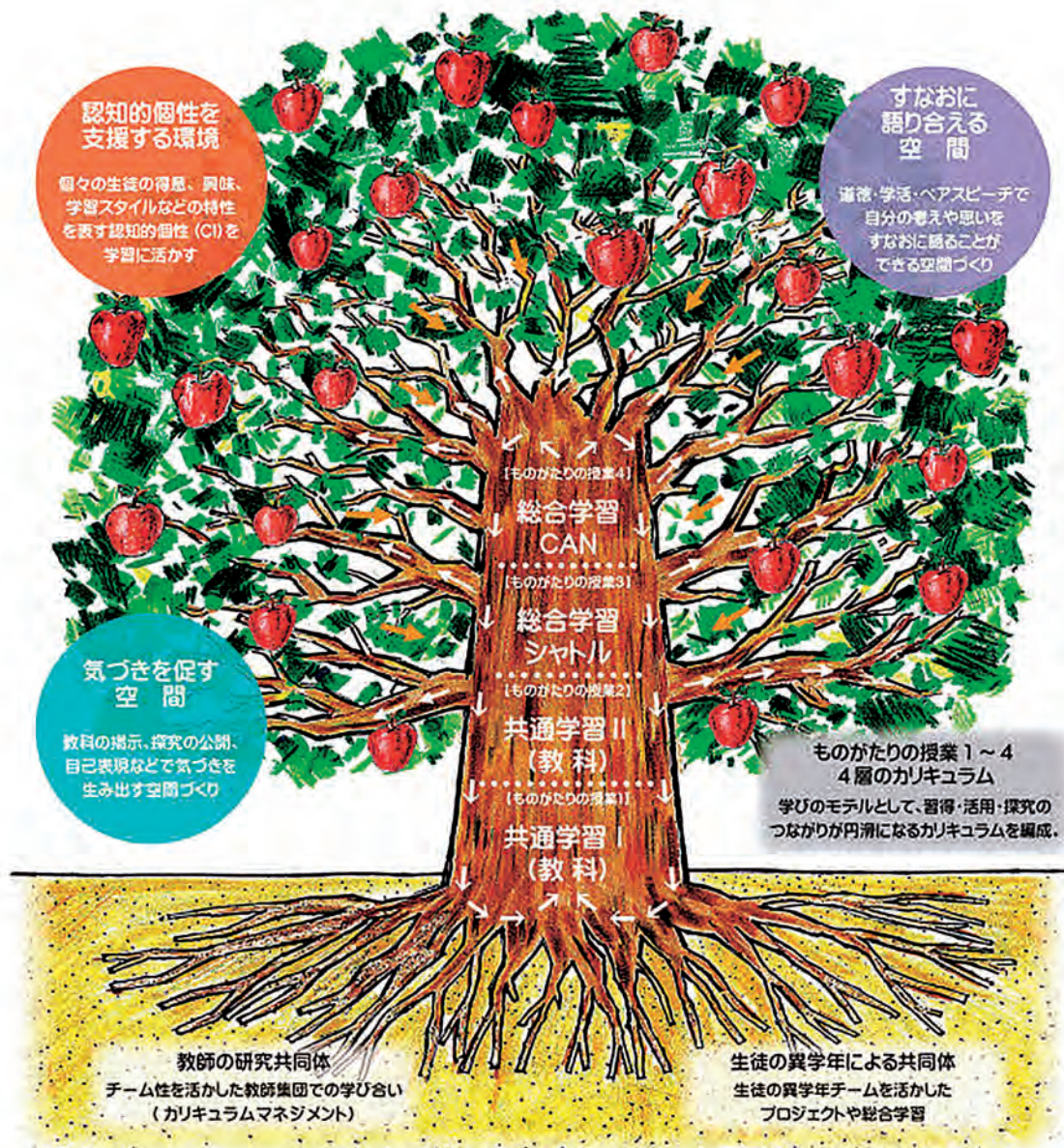
6月17日（金） 研究発表会

# 「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ「ものがたり」

—個が響き合う共同体をめざして—

6月17日（金）、平成28年度附属坂出中学校教育研究発表会が、晴天のもと盛大に行われました。当日は、県内外の幼・小・中・高・大学および教育関係機関などより800名を超える参会者をお迎えし、本校の教育実践をご覧いただくとともに、全国にその意義と歩みを発信することができました。今回の研究では、生徒が学習の主体者となる「ものがたり」の授業によって、「学ぶこと」と「生きること」の統合を具現化する指導方法やカリキュラムについて提案しました。

## 研究構想図～個が響き合う共同体の木～



総合学習CAN



教科・学校保健



【国語】



【数学】



【音楽】



【保健体育】



【理科】



【社会】



【技術】



【家庭科】



【学校保健】

講演

東京大学大学院教育学研究科教授の秋田喜代美先生には、「学びの物語を保障する授業」という演題でご講演いただきました。生徒の学びの物語を見とり、それを活かした授業のためには、深い理解を伴う授業デザインとその実施、さらに省察を学校全体で創りだすことの大事さを当日の授業の様子を基に分かりやすくご提案いただきました。



研究大会を振り返って…

各教科等の研究協議会やアンケートでは、参観者の方々から本校の研究実践について多くの賛同の声が寄せられました。また、生徒たちが自らの学びを振り返って新たな気づきや問いをもとに「ものがたり」を生み出す姿にも高い評価をいただきました。これも本校生徒一人ひとりの頑張り、各校園の諸先生方、そして保護者の皆様方のご理解があつてのことと深く感謝しております。そして今大会の成果と課題も踏まえ、今後も本校の教育実践を全国に発信していきたいと思っております。

## □ 本校研究の概要



### 1 本校は何を研究しているのか

一言で言えば、「生涯にわたって学び続ける強い学習意欲を育てるためにはどうするか」、つまり**学習意欲の向上**を目指した研究を行っています。そして、それを実現させる手立てが「**ものがたり**」の**持つ力を活かした授業**であると主張しています。

平成27・28年度 研究テーマ

「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ「ものがたり」

そもそも「『学ぶこと』と『生きること』をつなぐ」、とはどういうことでしょうか。

成熟した社会である現代の日本では、「学ぶこと」と「生きること」

はイコールではありません。戦後の復興期や高度成長期には、「よりよい生活」のために「よりよく学ぶ」ことは当然のことでした。ところが、社会が成熟し豊かになると、「よりよく学ぶ」ことは「よりよい生活」の条件ではなくなりました。学んでも学ばなくても、明日の生活はさほど変わらない。「学ぶこと」と「生きること」が乖離したのです。結果として「学習意欲の低下」や「学びからの逃避」といった、今日的な教育課題が生じてきます。

私たちは乖離してしまったこの「学ぶこと」と「生きること」をもう一度統合し、**生涯にわたって学び続ける強い学習意欲を学校教育の中で育てたい**と考えています。

## 2 学習意欲はどのようにして生まれるのか

どうすれば学習意欲は生まれるのでしょうか。

一般的には「分かる」「できる」ことによって学習意欲が生まれると考えられています。もちろんその通りです。どの教科でも「分からない」「できない」ままで、さらに学ぼうとする意欲など生まれようもありません。

でも、「分かる」「できる」だけで学習意欲は生まれるのでしょうか。私たちはそれでは足りないと考えています。

難関大学に合格したとたんに学びをやめてしまう大学生のことを

考えてください。彼は高校時代、素晴らしい先生（または予備校の講師）に「分かる」「できる」ようにしてもらいました。どの教科を取ってもトップレベルの成績です。でも志望校に入学したらサークル活動に集中し、学習は適当になりました。これはなぜでしょう。

学習の目的が「大学入試のためによい点を取る事」であり、その目的を達してしまっただけからです。

さらに言えば、彼はあくまでも知識を授けられる「受け身」の存在で、「学習の主体」ではなかったのです。優れた教師によって効率的に知識を授けられ、高い能力とたゆまぬ努力でそれを身につけ、素晴らしい成績を残す。しかし学習が終わればそこで全てが終わる。

また、彼は与えられた課題の答えを効率的に見いだす能力は著しく優れていますが、自ら課題を見だし、何か新しい発見や提案をすることはできません。なぜなら、そんな非効率的なことはしたことがないからです。

しかし、もし仮に彼が「学習の主体」であったらどうでしょうか。自ら課題に向き合い、解決方法を考え、調べ、試し、失敗する。悩んで他者の意見を聞き、教師に相談し、さらに自らの学びを振り返る。それでも分からず悶々とした時間を過ごす。

そんな過程の中で、自分なりの筋道だった考えや理解に到達したとき、「なるほどそうだったのか」「やっと分かった」という腹の底

からの実感が得られるのです。これは理性的なものだけではなく、直接人間の感性に働きかけるものです。そして、だからこそ強い学習意欲につながるのです。

私たちはこの「**自分なりの筋道だった考えや理解**」のことを「**ものがたり**」と呼んでいます。当然、一人一人の「**ものがたり**」は違います。今までしてきた体験、今持っている能力や知識が一人一人違うからです。

このような考え方は「**社会構成主義**(social constructionism)」に基づいています。そして、この「**社会構成主義**」こそが本校の研究の最も基礎となる理論です。

### 3 「社会構成主義」の学力観

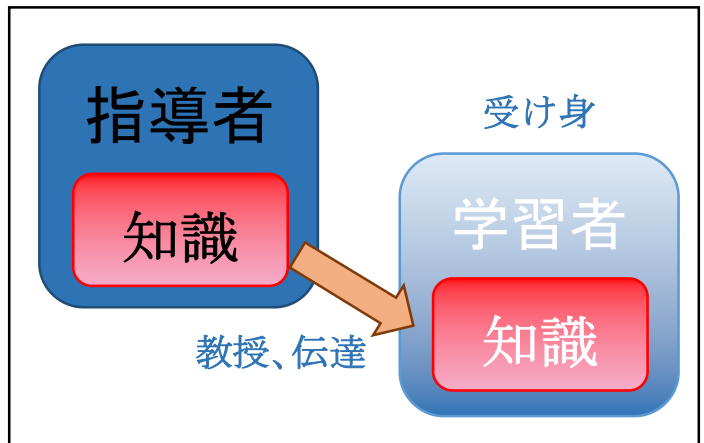
前章で「**社会構成主義**」こそが本校の研究の最も基礎となる理論だと述べました。では「**社会構成主義**」とはどのようなものなのでしょう。本校では以下のように捉えています。

#### (1) 知識や社会は客観的に存在しているものではない

「**社会構成主義**」は、一般的な「**実証主義**」の学習観に対比するものとして存在します。

「**実証主義**」の学習観とは、前章の「**優秀な大学生**」に象徴される学習観です。指導者が科学的で客観的な知識を、「**白紙**」の状態の

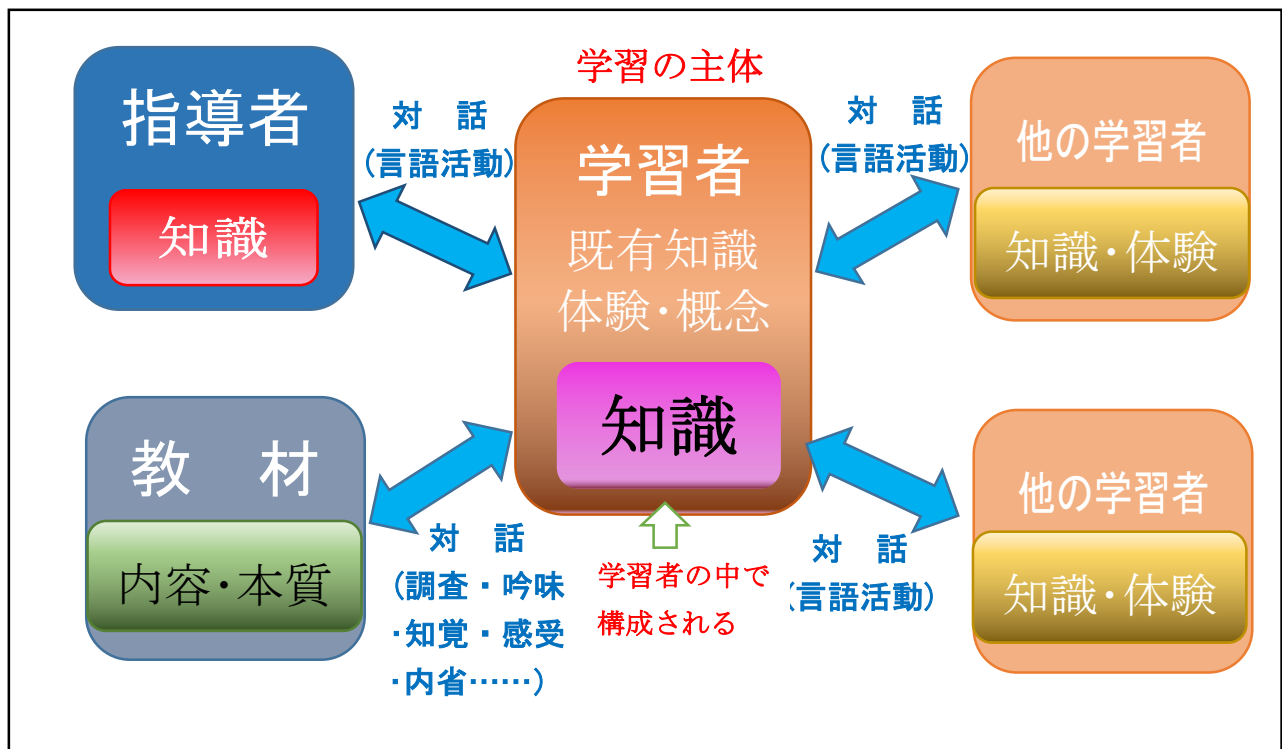
学習者に注ぎ込み蓄えていく。  
 そこではいかに体系的に効率よく知識を習得させるかが重要となります。学習の主導権は指導者にあり、**学習者はあくまでも受け身の存在**です。



【実証主義的な学力観】

これに対して「**社会構成主義**」では、知識や現実は客観的に存在しているものではなく、人々のコミュニケーション（言語活動）によって初めて、学習者の中に**構成されていく**ものだと考えます。

学習者は白紙の状態ではなく、既に、それぞれが学習内容に関連する**既有知識や体験、素朴概念**を持っています。そして教師から答



【社会構成主義による学習観】

えや解き方を教わるのではなく、自ら教材に働きかけ、課題を発見し、他者（教師、仲間）とコミュニケーションを取り、深く考える。自分の学習の過程を振り返り、他者の意見を吟味し、結果として新たな気づきに到達する。学習者自身が学習の主体となるのです。

つまり、「**社会構成主義**」の学習観に基づく授業は、必然的に「アクティブラーニング」にならざるを得ません。同時に「言語活動」なしには成り立ちません。

## （2）科学的な知識についてどう考えるか

「**社会構成主義**」では「知識や社会は客観的に存在しているものではない」と述べました。それなら理系科目の「公式」「定理」「法則」などはどうなるのだ、と考えられるかもしれません。確かに、これらが「客観的に存在しているものではない」つまり、「一人一人が違っている」のでは、学問の意味がありません。

しかし、「客観的な知識を身につける筋道」についてはどうでしょうか。

既に述べたように、学習者は全く白紙で学習に臨むのではありません。学習内容に関連する既有知識や体験、素朴概念などを持っています。これは「一人一人が違って」います。このような学習者に対して、一律に客観的な知識を注入して、本当の理解が得られるの

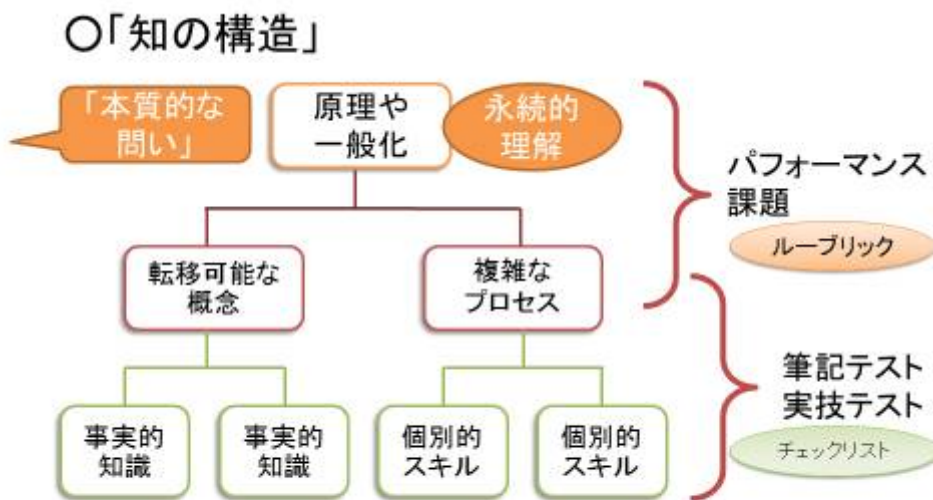


でしょうか。

例えば電気の学習で「オームの法則」や「フレミングの法則」をただ教えるだけなら、それを使って問題を解くことはできるようになるでしょう。しかしそれは「問題を解く」だけの知識であり、「電気」そのものについての「汎用的」な知識にはなりません。断片的で、時がたてば（テストが終われば）すぐに忘れてしまいます。

ところが、適切な課題を設け、複雑なプロセスをたどる学習を行ったとすればどうでしょう。容易に解決できない課題を「一人一人違う」既有知識や体験、素朴概念を持った学習者が、互いに意見を交流させ、自分と異なる意見をすり合わせ、考えていく。それをくぐり抜け、「**自分なりの筋道だった考えや理解**」に到達したとき、知識は「他に転移可能」で「汎用的」なものになるのです。

このことは、



文科省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会 - 論点整理 - 」P24より

左図に示す「論点整理」の中の、パフォーマンス課題に非常によく似ています。

パフォーマンス

課題は、知識や技能（スキル）を教え込むのではなく、様々な知識

やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題のことで、アクティブラーニングの一つの方法です。「ものがたり」の授業とパフォーマンス課題は、授業の表れとしては、よく似た形を取ります。ただし、大きな違いもあります。それについては別項で述べます。

ともあれ、「一人一人違っている」からこそ、「社会構成主義」の学習観に基づき「**自分なりの筋道だった考えや理解**」を促す授業、つまり「**ものがたり**」の授業が必要なのです。

## □ 「ものがたり」とは何か



### 1 「ものがたり」とは何か

「ものがたり」とは、本校独自の表記の仕方です。これは「社会構成主義」を背景にした「ナラティブ・アプローチ」という考え方に基づいています。「ナラティブ・アプローチ」は近年、社会学や文化人類学、臨床心理学等に取り入れられており、特に医療のケアの分野で注目されている考え方（手法）です。

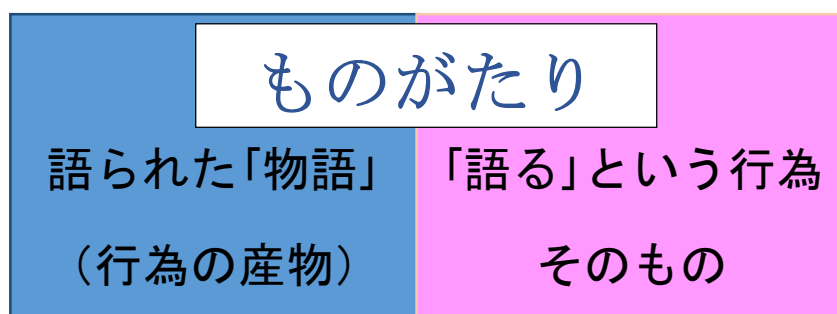
ナラティブとは「語り」または「物語」と訳されます。「語る」という行為と、「語られたもの」という、行為の産物の両方を包含する言葉です。双方を一語で表す日本語がないので、通常は「ナラティブ

ブ」とカタカナ表記をします。

ある事件（現実）を説明しようとするとき、「物語」は大きな力を発揮します。「科学」が「必然」と「客観」の世界であるのに対して、「物語」は「偶然」と「主観」を多く含むからです。「なるほど、それもあり得る」という理解です。だから人間は、ある事件（現実）を一つの物語として理解できたとき、その事件（現実）を「本当に理解した」と感じる（納得できる）のです。

もう一つ重要なのは、「物語る」という行為そのものです。例えば「人前で話すことの苦手な自己」を語った者は、以後それを語った者として存在することになります。「物語る」という行為が、人をそれまでとは違う人間にするのです。ナラティブ・アプローチが医療の、特にケアの分野で注目されている理由です。困難な現実に向き合っても、それを語ることで、現実に対する新たな意味づけや価値づけができ、克服していく力になるというのです。

本校では、上記のようなナラティブ・アプローチの考え方を取り入れ、語られた「物語」と、「物語る」行為の両方を包含する概念として「ものがたり」とひらがな表記しています。



## 2 「ものがたり」の持つ力

では、「ものがたり」の授業とは何でしょうか。

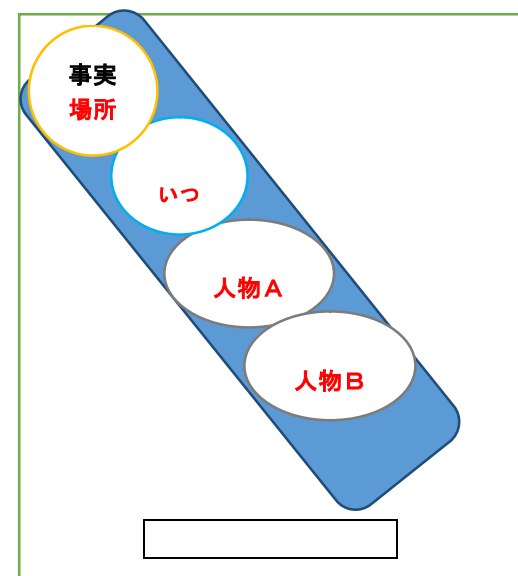
「『ものがたり』の持つ力を生かすように学習活動を組織した授業」  
です。では、その「ものがたり」の持つ力とは何か？

(1) 実感を伴う、深い理解が得られる

前章で、「人間は、ある事件（現実）を一つの物語として理解できたとき、その事件（現実）を『本当に理解した』と感じる（納得できる）」と書きました。これを具体的に説明します。

新聞やテレビでは様々な事件が報じられます。そこには多くの事実（5W1H）は示されますが、それだけでは単なる事実の集合にしかすぎません。一続きの「物語」になっていないため、「なぜそんなことが起こったのか」「どうしてそ

うしてしまったのか」などが分かりません。そのため、しばらくするとそんな事



件があったことすら忘れてしまうでしょう。

ところが、さらに踏み込んだ報道があり、背後にある **出来事** 人間関係や、個々の人物の置かれた状況、また、「その日たまたま」等の偶然や「過去にこんなことがあった」という背景などが分かってきたとします。

それを自分の過去の知識や経験とすり合わせ、一つの「物語」として筋道立てることができたとき、「なるほどそうだったのか」「それもあり得る」という実感を伴う深い理解に到達できるのです。

## (2) 主人公（主体）になれる

近年、「〇〇物語」というキャッチコピーのついた商品が多く見受けられます。「小豆島物語」「た



びものがたり」「大江戸温泉 【「小豆島物語」パンフレットより】 【たびものがたり】

物語」等、他にもたくさんあります。これらは「物語」の持つ力を生かしたキャッチコピーです。

「物語」には必ず主人公が存在します。そして、主人公が様々な人物と



【「大江戸温泉物語」パンフレットより】

関わり合い、幾つもの事件を経て、クライマックスにたどり着きま

す。つまり「〇〇物語」という商品は、「あなたが主人公ですよ」と言っているのです。「あなたが主人公で、あなただけの特別の体験ができ、最後にはクライマックス（大きな満足）が待っています」ということを暗示しているのです。

つまり「物語（ものがたり）」が生まれるためには、自分が主人公でなければなりません。外部から何かを受け取るだけの存在では「ものがたり」は生まれません。自ら主体的に関わっていく存在であるからこそ、自分だけの特別な「ものがたり」が生まれるのです。

### （3）語ることで、意味や価値を実感できる

「語る」行為には、必ず聴き手が必要です。自分と異なる他者に、自らの「ものがたり」を伝えようとするなら、ただ思いつきを言葉にするだけではいけません。相手に分かってもらうためには、事実の因果関係を筋道立てて、論理的に説明しなければなりません。その中で、



「ものがたり」の**新たな意味や価値**に気づいていきます。

つまり、それまで「〇〇だ」と思っていた出来事が、他者に語ることによって「△△だった」と気づけるということです。医療にお

けるケアの分野での「ナラティブ・アプローチ」は、正にこの力を重視しています。マイナスの事実だけを認識し、うちひしがれていた患者が、語ることによって、事実の關係に新たな意味を発見し、希望を見いだすのです。

以上三つの「ものがたり」の持つ力を授業に生かそうとするのが本校の「ものがたり」の授業です。



## □ 「ものがたり」の授業



### 具体的な「ものがたり」の授業とは

前項で、「ものがたり」の授業とは、『ものがたり』の持つ力を生かすように学習活動を組織した授業』であると述べました。そしてその「ものがたり」の持つ力とは、次のようなものでした。

- (1) 実感を伴う、深い理解が得られる
- (2) 主人公（主体）になれる
- (3) 語ることで、新たな意味や価値を実感できる

具体的にはどのようにして授業にこの力を生かすのでしょうか。

イメージとしては、「本校研究の概要」で述べたように、以下のよ

うな授業を想定しています。

自ら課題に向き合い、解決方法を考え、調べ、試し、失敗する。悩んで他者の意見を聞き、教師に相談し、さらに自らの学びを振り返る。それでも分からず悶々とした時間を過ごす。そんな過程の中で、自分なりの筋道だった考えや理解に到達したとき、「なるほどそうだったのか」「やっと分かった」という腹の底からの実感が得られる。

では、どのようにすれば各教科でこのような授業になるのか。

以下の3つがポイントであると考えています。

- (1) 新たな「ものがたり」が生まれる単元構成と問い
- (2) クリティカルに「聴く」「問う」ができる生徒の育成
- (3) 語り直しができる生徒を育てる教師の関わり

以下、国語の「走れメロス」を例に説明します。

#### (1) 新たな「ものがたり」が生まれる単元構成と問い

「走れメロス」の授業で、「この小説の主題は『真実』です。その理由は…」などと解説をしたのでは、授業の意味がありません。生徒自らが作品に関わり、自分の力で主題に迫ることが、国語の力を身につけるために必要です。そのため、以下のような単元構成を考

えました。

### 【「走れメロス」の単元構成例】

時間	学習内容と学習課題（中心の問い）
1	・ 全文を音読する ・ 設定（時・場・人）、構造（Ⅰ起承転結）を読み取る <b>主役、対役、No.3はだれか</b>
2	・ 人物像を読み取る
3	<b>①王は悪人か②メロスは善人か ③王とメロスの対比</b>
4	・ 構造（Ⅱクライマックス）を読み取る <b>クライマックス（メロスの考えの変わる所）はどこか</b>
5	・ 主題に迫るⅠ <b>クライマックスまでメロスは何のために走っているか</b> <b>クライマックス以後メロスは何のために走っているか</b> <b>王はなぜ考えを変えたか</b>
6	・ 主題に迫るⅡ <b>セリヌンティウスがメロスを疑ったのはいつか</b>
7	・ 主題に迫るⅢ <b>主題（作者が伝えたいこと）は何か</b> ・ 学習記録文を書く（残りは家庭学習）

それぞれの学習課題は一貫して、生徒自身が本文中の表現を根拠に判断していくものとなっています。そして、この単元構成の中で、最も重要なのは6の「セリヌンティウスがメロスを疑ったのはいつか」という問いです。

5までの活動で、メロスの走る理由が、「王に勝つため（自分のため）」から、「信頼に報いるため（セリヌンティウスのため）」に変化

していること、また、極度の人間不信であった王が考えを変えたのは、メロスが間に合ったからだけではなく、メロス、セリヌンティウス共に人としての弱さを抱えながら、それに打ち勝ったことを押さえています。このまま7の「主題は何か」に入っても学習は成立します。しかし、あえてここに6の問いを加えることで、より深い理解に導こうとしています。

### 【新たな「ものがたり」が生まれる問いの条件】



新たな「ものがたり」が生まれるためには、**全員がいずれかの立場に立てる問い**が必要です。「セリヌンティウスがメロスを疑ったのはいつか」という問いに対しては、とにかく何らかの答えを持つこ

とができます。生徒は「一度だけ、ちらと君を疑った」という表現からスタートして、根拠となる他の様々な表現を探し、いつであるかを特定します。そして教師は、いくつかに分散する答えを、「刑場に引き出される前か、後か」の2つに整理します。

このいずれの立場を取るかによって、生徒の解釈は、セリヌンティウスが「メロスを信じること」だけを大切にしているのか、「自分の命」も大切にしているのかに分かれることが、明らかになっていきます。また、セリヌンティウスの対となるメロスの走る理由も「信頼されているから」走るのか、「セリヌンティウスの命を助けるため」に走るのかに分かれます。

「命」と「真実」「信頼」という言葉の持つ、より深い意味に触れることになるのです。「間に合う間に合わぬは問題ではないのだ、人の命も問題ではないのだ」という表現を読み切れていない生徒は多くいます。この表現は「セリヌンティウスの命がどうなってもいい」のではなく、たとえ間に合わなくてセリヌンティウスが死んだとしても、信じられていた以上「走るより他はない」とメロスが覚悟したことを意味します。同じように、セリヌンティウスは、たとえメロスが間に合わなくても、信じ切って死んでいく、という覚悟をしたということです。だから「刑場に引き出されても、平気でいました。王様がさんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだ

け答え、強い信念を持ち続けている様子でございました」という表現の意味が新たに浮き上がってくるのです。この段階ですでにセリヌティウスは、「(メロスが) 間に合う間に合わぬは問題ではないのだ、人の(自分の) 命も問題ではないのだ」という境地に至っていると考えられるのです。二人の真実<sup>マコト</sup>は生死を超えているのです。

もちろん、このように解釈することが絶対ではありません。いつ疑ったとはあらわに書かれていないのですから。当然、上記の解釈を説明して一方の立場に立たせる必要もありません。ただ、「セリヌティウスがメロスを疑ったのはいつか」という問いによって、生徒が本文の表現を手がかりに「真実」のより深い意味に到達できる可能性があるということです。以下に生徒の学習記録文を示します。

色々	イコ	いの	日	刑	だ。	走	悪	も	合	信	を	は	に	強	ら	で	ス
々な	コ	の	を	場		っ	い	強	わ	念	を	刑	に	い	が	の	
こと	よう	では	過	に		た	薄	い	な	し	疑	場	言	信	っ	こ	
が	も	ない	ぎ	引		後	を	信	く	と	気	に	っ	念	て	と	
頭	し	か	レ	き		又	見	念	て	は	配	引	い	を	も	を	
と	も	と	い	さ		メ	た	を	も	メ	が	き	ら	全	刑	刑	
め	し	か	る	さ		後	持	一	く	あ	場	く	場	場			
ぐ	ない	か	る	か		セ	度	な	た	に	は	に	に				
っ	の	と	か	前		リ	で	疑	い	こ	セ	に	引	に			
て	では	か	ら	は		は	つ	こ	う	リ	い	き	に				
も	は	か	人	ず		な	い	分	は	ヌ	る	出	も				
お	な	ま	口	と		い	い	も	テ	た	下	可					
か	な	さ	ス	一		と	強	ウ	イ	れ	れ	可					
れ	ど	か	は	人		元	い	ス	ウ	た	も	可					
く	と	メ	間	で		間	に	ス	ス	を	も	可					
ない		ロ	に	二		に		ス	ス	か	も	可					
		ス	合	で													

ぼうう。レカレ、刑場に引き出された後であ  
 れば、王にカウカワれるのをアイロストラト  
 スが見た後である。刑場に引き出されても平  
 気でいて、メロスが来ると、と強い信念を持  
 つていた後に、疑った。たりするだろうが。つり  
 合げられると死を感じるから、疑うという意  
 見があつたが、つり合げられていく途中にメ  
 ロスは帰つてきている。ここでも疑う。は  
 危険を感じたからではなく、メロスが約束  
 を守つてくれまいのどほほいかという不安が  
 うのものだ。死を感じたから疑つたけど、帰  
 ってきたからやっぱり信じられる。という單  
 純なものではないはずだ。疑つたからこそ、  
 来ないことも覚悟で、信じて待つ。いいよと  
 いう気持ちができるはずだ。そんな気持ちで  
 待つ。ているのがアイロストラトが見た場面  
 だ。刑場に引き出された後であらば、信じて  
 待つという場面が入らない。それでメロス  
 とセリヌンティウスの友情はデ、オニスに負  
 けてしまふ。一度疑つてから強い信念を持つ

コクノ 2-70 40x20

授業が全て終了した後、振り返って書いている文章です。「いつ疑  
 ったか」という問いから、メロスとセリヌンティウスの間の「真実」  
 について、「たとえ間に合わなくても、死は怖くない」「疑ったから  
 こそ、来ないことも覚悟で」など、新たな「ものがたり」が生まれ  
 ています。また、そのことが「王はなぜ考えを変えたか」という問  
 いの解釈にも影響を及ぼしているのが分かります。

上記のように、単元構成と問いこそが「ものがたり」の授業を成  
 立させる鍵となります。

## (2) クリティカルに「聴く」「問う」ができる生徒の育成

本校では「クリティカルに」を「相手の言うことを鵜呑みにせず、

吟味して」というニュアンスでとらえています。「聴く」「問う」力は、一朝一夕には身に付きません。多くの手立てを用いて、継続して育てています。実際の生徒にどの程度「聴く」「問う」力が身に付いているのかは、研究発表会でご覧ください。

### (3) 語り直しができる生徒を育てる教師の関わり

教材や他者との対話が充実していたなら、自己の「ものがたり」はいったん解体されています。様々な情報や考えを自己の中に取り入れるからです。そしてもう一度それを語り直すことで、新たな意味や価値に気づき、「ものがたり」はより発展して再構築されます。その方法は多々ありますが、その一例を以下に示します。既出の生徒が、授業後に振り返って書いた文章の終末部分です。

名前が書いてある人物は重要人物と聞いた時	ロストラトスはおまけのよう存在だった	んて考えもしないところだった。ましてフ	セリヌニテイウスがいつメロスを離したか	く考え、知ることにするとは思わなかった。	人のことも、デハオニスのこともこんなに深	ぐらいしれか思いつかないだろう。まさかメロ	姿に感動した、とカオジい、とかそんなこと	れか書けないうだろう。メロスが一生命命走る	け、なんといわれたり、おまけらしくに描ぐら	走れメロスと授業で世帯に感動文を書	又の魁力なのだろう。	その人といたい、と思うだろう。それがメロ	た心で接してくる人がいた。だからメロ	メロスに頭は考えている。みんな心があるメロ	と思う。どんな場合にも、知らず知らずの	打算を離れた心、というのとはとも離れ	いし、命だ、と投げ出す覚悟がある。一利書	スのため。自分のことなんてほとんど頭にな
----------------------	--------------------	---------------------	---------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	-----------------------	-----------------------	-------------------	------------	----------------------	--------------------	-----------------------	---------------------	--------------------	----------------------	----------------------



は、どこが重要なんだろう、とも思った。でも  
 ち、今日はそれ以外の人物について、とても深く  
 理解できたと思う。授業で一人で見えること  
 で、少し考えが深まり、友達と交流するのと  
 どもう少し考えが深まり、全議の形がワラズ  
 のたくさんの意見を聞くことで、さらに考えが  
 深まり、そして今こうして評論文を書いたこ  
 とで、レッカリとまとめられる。深めて授業  
 通りではなく、自分の頭で考えたことをどん  
 どん広げていけるので、最後はじっくりと、  
 こういうのを書くのは、なんとなく好きにな  
 った。いろいろある、と思った。  
 「走れメロス」という題は、メロスが走っ  
 ていけるから、というのではなく、信頼してく  
 れているせり又ニライウスのために走るんだ  
 / という気持ちが込められているのだと思う。  
 本文中に、「走れ！メロス」という部分があ  
 る。そこは、メロスが悪い夢から覚めて、走  
 り出す場面である。メロスはその前から走っ  
 ていた。でもおえて、その後からが、作者に

して、その伝えたい「走れメロス」なのだと思  
 う。私にとっでは、その「走れ！メロス」と  
 いう文章が印象的でならない。  
 「走れメロス」は、文章の中の言葉から、  
 登場人物の性格や気持ちもいろいろ読みとれ  
 る。そういう活動がいろいろあると、生かす  
 ことができたらいいなあ、と思う。

「走れメロス」自体に対する振り返りであると同時に、学習を進めてきた自分を振り返り、そこに意味や価値を見いだしているのだと考えます。また、「ものがたり」によって自己形成を行っている一例であるともいえます。